

お墓の選び方



縄文時代5,000年前

(環状列石墓地)



墓は亡骸が大地に戻る地点を墓標として印し、輪廻転生の願いを叶えられるよう、また墓に向かって 残された人たちが故人を敬い、絆を確かめ合うことができる場所として、縄文時代より日本人の 心の中に在り続けます。

現在まで使用されている墓は**家父長墓**と言われ、家系を継ぐ者が代々受け継ぐこと、次男、三男等は新たな家父長墓を起源することが前提となっています。これは江戸時代初期のキリシタン廃止による信仰は仏教のみとする政策に端を発しています。核家族化と少子化により、この体制は継承者不足よって維持できなくなっています。

墓の形

A) 家父長墓	B) ふるさと合同墓	C) 納骨堂	D) 樹木葬	E) 合同墓
6骨	20骨	400骨	50骨	2,000骨以上
儒教思想に基づく直系相続が原則です。	直系相続の縛りを無くしたファミリー専用の合同墓で、形は家父長墓、樹木葬に似ています。	ロッカー型：遺骨を約30年間預かり、その後は大地に還ります。参拝時には遺影と同時に遺骨とも会えます。	シンボルツリーの基に集まる納骨堂型。ただし、参拝時には遺骨とは会えません。	墓の継承者有無は問わず、誰とも仲良く納まる墓で、一定期間終了後には遺骨は大地に還えされま。構造には古墳型、芸術型、樹木葬型等があります。
継承者有無の依存度: 高い ←————→ 低い				

参考：海洋散骨

日本は四方を海に囲まれている関係で、遺骨を直接海に撒きたい思いがありますが、この方法は個人の意思だけではどうにもなりません。

国際環境保護、日本の国内法、そして散骨する場所の住民（魚介類も含む）に対する社会的な同意形成等が難しく、思いとどまりましょう。

お墓コンサルタント
NPO維持管理支援センター内
メール：sawkura@outlook.jp